

季刊誌 C E L 5 0 号

「 C E L からのメッセージ 」

大阪ガス エネルギー・文化研究所 副所長  
安達 純

前号でご紹介した大阪市立大学と C E L の連携による公開講座「未来都市を語る 生活・文化・環境と経済社会」の全日程を盛況裡に終えることができました。住み、働き、学び、そして集うという、まさに生活の舞台である‘都市’に寄せる学生や市民の関心の高さにいまさらながら驚くとともに、さまざまな視点から問題提起をしていただいた講師の先生方に心よりお礼申し上げたい。

さて、本号で取り上げたテーマは‘環境’である。「われわれが、これまでと同じような生活を続けていくなれば、100年もしないうちに人類は滅亡するであろう」といった、いささかショッキングな内容の「ジオカタストロフィー」で、C E L が警鐘を鳴らしたのは1991年のことである。それから8年が経過した今、何かが変わったのだろうか。

世界規模で C O 2 の削減目標が掲げられ、その達成に向けての取り組みが始まったことは、確かに大きな前進であろう。しかし、その一方で事態はます

ます深刻の度を増している。

その徴候のひとつが‘こころ’の問題である。生命誌研究館副館長の中村桂子氏に次のような指摘がある。「科学技術は、人間を自然の脅威や面倒から解放し、人間の生きもの離れ、自然離れを目的とするかのように人工物を生み出してきた。今では、私たちの日常は人工物の中で営まれている。その快さを楽しむ私たちだが、近年、環境破壊、つまり外の自然の破壊が大きな問題になってきただけでなく、人間の内なる自然も破壊されつつあると思わせる現象が目立ってきた。合理性だけを求めて進めてきた人工社会が、35億年を超える生きものをつくる世界と合わないことが見えてきた」と。私たちのこころの中の、あるいは普段は意識にさえ上らない奥深いところに宿っている原風景ともいべき自然を、自らの手で破壊してしまうことが、私たちの精神に歪みを与えずにはおかないということであろうか。

こうした流れに歯止めをかけるには、一体どうすればよいのか。中村氏は、人間のヒトという部分、つまり自然の一部である部分を認めることから出発すること、そして、自然・人・人工が一体化することの必要性を強調している。そうであるとして、そのための具体的な道筋をどこに求めればよいのだろうか。

身近なところに、こんな道ができ始めている。大

阪府豊中市は今から3年前に、市民・企業・行政が協力して、地球環境を守る取り組みを進めるための「とよなか市民環境会議」を発足させた。そして、価値観や利害関係を異にするさまざまな人々が議論を重ね、地域としての環境行動計画である「豊中アジェンダ21」をとりまとめた。そこには、豊中の目指す環境の理想像や、それに向けた市民レベルでの具体的な活動メニューが織り込まれている。

また、兵庫県西宮市では、次代を担う子供たちが環境に優しい「地球市民」に育つように、学校・行政・企業・ボランティアが協力して環境学習活動を進めている。この7年前に西宮市が始めた「地球ウォッチングクラブ」は、いま全国規模で展開されている「こどもエコクラブ」のモデルとなった。このように、環境改善のための具体的な取り組みが市民レベルで進んでいるのは、10年前とは大きな違いである。そして、その輪は関西に、さらには全国に広がりにつつある。

こうした実践活動は、直接的には外なる環境の改善を目的としたものである。しかし、実は内なる環境の回復のためにも大きな効果を発揮するのではないだろうか。より良い地球環境を求めて、自分を棚上げせずに主体的に関わること、そして意見を異にする人と議論を戦わせ、互いに知恵を出し、学び合うこと。そうすることによって、これまで疎遠にな

っていた自然や他人との関係、あるいは責任を回避してまともに向き合ってこなかった自らとの関係を回復する道筋が見えてくるのではないだろうか。そうした新しい社会を築く先導役として、関西は最も近いポジションを占めていると思われる。